春日部市市民活動センター　相談座談会（第1回～3回） ダイジェスト
（そろそろホンキで）事業継承・世代交代・後継者育成を話しましょう！

●趣旨

2021年、10周年をむかえた「ぽぽらフェスティバル」の企画で、市民活動、自治会などの地域活動団体の多くが課題としてとらえている「世代交代、後継者育成、活動継承」をテーマとした学習・交流会を開催しました。世代交代を成し遂げたフュージョン長池 創業者の富永一夫さんをゲストに、事例やコツを学び、参加者同士でも意見交換。その活動の継続です。

明確な答えはない課題ですが、話すことにより「なぜ世代交代は難しいのか」「活動継承の意義や方法」などアイディアを見出していきます。

●スタイル

・毎月1回程度テーマやゲストを設定した「相談座談会」を開催し、内容を深堀りします。
・基本的にゲストによる話が中心で、オンラインで視聴や参加、意見交換もできます。
・相談や課題の概要や出たヒントやアイディアはHPやSNSで共有していきます。

●ゲスト、進行

・7月～9月の3回は引き継ぎの両側にいる2人がゲストです。
　春日部C工房　代表　西山光昭さん（70代）
　“川のお兄さん”　小林知輝さん（20代、学生）
・進行　春日部市市民活動支援センター　アドバイザー　生越（おごせ）康治

○2021年の「ぽぽらフェスティバル」での富永一夫さんのお話より
・「事業」「ボランタリーな活動」は分けて考える。
・活動も団体も“ピンピンコロリ”がいい（ボランタリーな取り組み）
・後継者育成は長期スパンでとらえ、“第2の矢”も用意する。
・他の団体のNo2、3などに声をかけてもいい。活躍の場となる。
・代表に定年あり、活動に定年なし。
・「外から来た人」だからこそが言えることがあり、役割もある。
・本当になくせない活動は別の場所で団体やキーパーソンを育てる。
　市民活動センターがしっかり地域の課題と団体の状況を観ていく。
　→今後の市民活動センターの力の発揮どころ

●目次

・2～3P　ゲスト2人の背景、イントロ
・4～7p　ゲストや参加者とのかけあいから
・8p　　座談で出たアイディア、この先に掘り下げていくトピックス

●春日部C工房　代表　西山光昭さん

○活動のきっかけは東日本大震災

10年前の定年後から地域活動をはじめました。それまでは関心はありましたが、忙しくて参加できませんでした。きっかけは東日本大震災。塩釜で復興のためのまちづくりの「工房」が話題になっていて、災害があろうがなかろうが、街の中に市民がかかわれる「工房」があればいいなという想いが芽生えて、活動をはじめました。ちょうどそのころに、市民活動センターができ登録団体に。その頃、埼玉県が川に着目していて、私が住む身近な古利根川再生の取り組みがはじまっていました。コンクリート護岸の計画を止めたくて、何度も役所に行きました。最後は部長も親身になって聞いてくれました。その話し合いの中から、家の前の遊歩道計画が整備され、河川敷を親水性がある景観が保全されました。せっかくつくられたので、この景観を守ろうと思い、遊歩道の整備などの活動を10年間続けています。花壇づくりなど様々な取り組みをしていますが、「事業」や「団体」として取り組んでいるわけではなく、家族単位でできることから始めています。

○活動の“手ごたえ”10年続けたら、明らかにゴミを拾うひとが増えた！

どんな活動でも経費がかかってしまいます。持ち出しでやることがほとんどだと思いますが、誰でも活動ができるように、なるべくお金をかけずに活動をしてきました。しかし道具など必要なものもあります。そこで、遊歩道に募金箱を置いてみる取り組みをしてみました。多くの方に少しづつご協力をいただきたいため、特注でコインしか入らない設計にしてもらいました。始めてみると「紙幣も入れたい」というあたたかい言葉も。1ヶ月間×3回の募金で平均1万5千円ものご協力があり、とても感謝しています。また、最初にはじめたころより、明らかにゴミを拾う方が増えました。継続した活動の実績だと思っています。

○活動の今後について

昨年、富永さんの話を聞いて、今後、活動をどうしようかと考えました。

近所に住んでいる、よく遊歩道を使っている子どもがいるご家族が、今までも活動に参加してくれていました。継続していくためには役所への届け出が定期的に必要になるので、それを今後引き継いでやってくれませんか？とお話をしてみたんです。

やはり負担になってしまったのか、その話をしてからぱったりと遊歩道に来なくなってしまいました。その家族にやってほしいなと勝手に期待をしていたんです。このお声がけは“失敗”になってしまうかもしれません。

●川のお兄さん、小林知輝さん

○おじさんの一言がきっかけに！

遊歩道の整備やゴミ拾い、外来種の駆除、子どもたちに魚のとり方を教えるなど「川の取り組み」をしています。また、堆肥づくりなど農業文化の振興などの活動もしています。活動のはじまりは埼玉県の「川の再生プロジェクト」。身近な川が整備の対象にならなかったので、下流の“いい川”まで遊びに行っていたんです。そこでたまたま「川の団体」が活動していて、そのおじさんに、「ジュースあげるから一緒にゴミを拾わない？」と声をかけられたんです。それ以来、その方々に川の遊びや整備などについて教わりました。そのころ（小学生）は市民活動をしているという意識はありませんでした。その後、自分は10歳から20歳になりましたが、当時70歳だったおじさんたちは80歳になっていました。自分が教わったことを、自分も引き継いで、子どもたちに伝えることができたらいいなと思っています。

○「一言」が尊重されない

会議に参加することもあり、「WEBを使えば印刷費を安くなりますよ」「SNSを使えばもっと広くいろんな人に活動を伝えられるんじゃないですか」と提案をしたことがありました。しかし、その時に否定はされなかったんですが、真に受けてはもらえませんでした。活動の反省会で、危険な部分の指摘をしたこともありましたが、議事録にも残されないこともありました。自分としては純粋に活動のための意見だったのですが、それは自分が若すぎたのか、伝え方がまずかったのか。受け入れられていないな、と感じ、その活動から離れてしまったこともあります。

○同世代へも伝えたい

地域活動の「後継者育成や次世代の担い手」のための団体を同級生たちと立ち上げましたが、それはなぜかうまくいきませんでした。地域のボランティアにも参加している同級生たちでしたが、自分の想いが強すぎてしまったのか、上にも横にも理解されないような状況になってしまい、今後、その団体は閉じることに。

そのほか紆余曲折もあり「自分は必要とされていないんじゃないか」「市民活動ってなんなんだろう」とふさぎ込んでしまい、活動をやめようと思った時期があります。しかし、富永さんのお話を聞きに行ったり、その他の地域で環境保全活動ができるようになったりと、現在は前向きに活動しています。場所を変えてみたらうまくいきました。いつか、うまくいかなかった地域でも活発に活動できればいいなと思っています。

ちなみに最初の川の団体には今年度、役員に任命されました。少しづつ認められたんでしょうか。

—-----ゲスト2人にお聞きしたことや、参加者とのかけあいなどから----------

○「誰のため」に活動を引き継いでほしいと思っていますか？

（西山さん）身近な自然環境を守る活動なので、その周辺に住む方々が「この景観を次の世代に残したい」と、今後も思って続けてくれたらいいなと思ってはいます。「誰」というか、「命のにぎわい」づくりだと思っています。

（小林さん）まとを得た答えにはならないが、「この景観を残したい、次の世代にも」という気持ちでやっています。人を含めた「多様性」が大切で、それは環境も市民活動も継続のためには必要だと思っています。

○自分と同じことをやらせようとするのは、後継者育成ではない？活動したいという想いの引き継ぎや育成が必要では。

（西山さん）自分の団体は続けなくてもいいとは思っていますが、行政から“借りて”景観保護をする申請が毎年必要なので、それを引き継いでほしいという思いがありました。理想は手続きなく、地域の住民が当たり前のように活動できるようになることです。

（小林さん）川関係の取り組みの話ですが、活動が続けられれば、組織は続かなくてもいいんじゃないかと思っている活動者は多いと思います。ですが、活動する人はそうそう出てこないので、そのために組織は続けた方がいいと思っています。

○川が汚れているから清掃をする、などの実務的な部分の「市民活動」と、その団体や活動が「自分の居場所（アイデンティティ）」になっているから続けている、という側面がある。

・（小林さん）「自分の居場所」になっていて、自分自身の人格形成にもなったと思っています。

・（西山さん）居場所は大切だとおもっています。若い人たちとつながる機会をつくるように、意図的にうごいています。

○若い世代も入れる「雰囲気」をつくっておく。

（小林さん）「若者だから」「経験が浅いから」というだけで、話を聞かない、その姿勢がないような団体や組織があります。対等に言い合えるような雰囲気が必要です。

（西山さん）自分がかかわったことがある団体では年齢や経験年数は関係なく、みんな下の名前で呼び合っていた。そうすると、対等の雰囲気が出て、とても良いと思いました。

（小林さん）市民活動は年齢層がどうしてもかたよってしまうのが問題なんだと思います。活動後の懇親会でも年齢層がかたよると、同じ話題、懐かしむ話題などで盛り上がりがちで、他世代や他の属性の人が参加をしても、疎外感を感じてしまいます。

○このまま活動ができなくなり、引き継ぎがうまくできなければ、活動やこの地域はどうなるのか。また新しい人が活動することになると思いますか？

（西山）景観10年、風景100年、風土は千年と言われることがあります。淡い期待ですが、自分がやっていることを引き継いでくれればいいなと思っています。整備されていない遊歩道になるか、木々が切られてしまっているのか、それは20年、30年後にこの近隣で生活している

人たちが選択をしていくのではないかと思います。

また、今困っている方々を支えている福祉の活動について、その組織が継続していくのが一番いいのですが、大切なのはその中身、そのような活動があることを多くの方に知ってもらう必要があります。本来であればそれはこの市民活動センターの役割ではないかと思っています。

（小林）12年前、活動を始めたときに3人同世代がいました。しかし、続けているのは私だけになってしまいました。なので、私はたぶん「いない」と思っています。ボランティア活動家と、「市民活動家」はちょっと違うと思いますが、ボランティアの方は出てくると思います。ですが、市民活動家はなかなか出てこないと思います。

（西山）活動がはじまって、終わっての繰り返しになるのはさみしいですね。ホモサピエンスの歴史のようです。

（小林）もしなくなったとしても、経験や知識、例えば調査活動の結果など、それが残っていれば次に活動する団体がまったくのゼロから始めなくてもよいということもあります。

（生越）それを、地域の市民活動センターがアーカイブス化、なにか残せればいいなと思っています。情報だけではなく道具類もとっておけるとさらに。解散や活動をやめる時は必要はなくても、もう一度やろう、という人が活用してくれればいいなと。場所が必要になってくるので、空き家を活用できるといいですね。

（西山）例えば河川のゴミを拾う、整備するような活動の場合は、必ずしも団体や組織が必要ではない場合もあります。ゴミを捨てない、または拾うといったことが、当たり前の“文化”のようになっていけばいいと思っています。

○若い世代や新しい参加者を増やすために

（参加者）目的によって、若い人、シニアなど、ある程度の年代がかたまる団体があってもいいと思います。もちろん、多世代がいるといい活動もあります。私の経験では、会員が誘ってきた（口コミ）人は長続きする傾向があります。会員に、イベントへ友人知人を誘ってもらうように呼びかけています。活動の「楽しさ」も必要で、自身がやった活動への“感謝の声”が聞ける機会（場）があると、継続への原動力になります。

（西山さん）「楽しい」だけではなく本質や目的も必要で、楽しい活動の先や裏側の問題など、「考える」ということ失わないようにしたいと思っています。

○「継いでほしい（継ぎたいと思うもの）のは“組織（団体）“か“活動“か“仕組み“か“想い“か“経験か”」

・（生越）双方が曖昧な認識のままなのでうまく継承できないのでは？

・（小林さん）引き継ぎは、何%くらい許容できるのか、お聞きしてみたい。守るのが得意な人、改革が得意な人がいる。改革は“破壊者”になってはいけないと思っています。

○若い世代に「想い」を伝える機会ができた。

（西山さん）「活動の継承」を考えるようになり、河川などを担当する県の担当者に相談に行ってみました。その担当者は話をよく聞いてくれて、市内の高校に一緒に行ってくれました。そのことがきっかけになり、春日部女子高校が授業に呼んでくれ、活動のことを若い世代に話す機会ができました。なにを伝えるのか、今資料を作成中です。
（生越）担当課に話に行くことや、その関係を築いたことなど、なかなかできることではないので、すごいと思いました。つい大量の資料を配布しようとしたり、全部をつぎ込みたくなってしまいますが、若い世代にまずは関心を持ってもらうような「伝え方」ができたらいいですね。

○「飛び出た」経験が活きた

（小林さん）話を聞いてくれない、通じない、情報共有のツールが合わないことがあると「外に出てやった方がはやいな」と思ってしまいます。私は、嫌になって飛び出て1人でやろうとしたら、うまくいきませんでした。その経験があり、今では折り合いがつくなら、組織のなかでやれればいいと思っています。

○次代ではわだかまりも解消？**SNS**の活用

（小林さん）おなじような活動をしている団体同士、“長”の仲が悪いのですが、SNSを活用する時代になり、2番手や次の世代同士がつながり、「似たことをやっているよね」と、一緒に活動できるようになった事例があります。講演で富永さんが言っていた「他の団体の2番手も候補になる」はまさにあることだと思いました。

―-----解決に向けたアイディアなど---------

○「共同代表」で一緒にやってみる

いきなり任せる、継いでもらうのではなく、自分が継いでほしいと思う人に「共同代表」になってもらい、数年間は一緒にやってみる。

○「地域の課題」を見える化する

例えば川の清掃活動の場合、あえて清掃しない部分をつくってみる。「このいっかくを一緒にやってみる人募集！」などの表示をしてみて、もし誰も清掃しなかったら、という部分を明確にしてみる。

○「分野」と「分野」のハザマに注目する

普段は川の清掃をしている団体が、障害のある子どもたちとカヌーを楽しむ活動があるなど、「環境」や「福祉」といったキーワードを超えた活動は多くあります。もし、環境の分野で誰か担い手を探そうとなったとき、市民活動センターのスタッフが「環境」だけで検索すると、そのような活動をしている人は出てこない場合もある。後継者や関心ある人に呼びかけるとき、一見異なる活動をしている人を探すことも有効になる。

○再度、“ネットワーク”を活かす

20年前、異分野同士の団体が知り合う場や、情報交換の目的、または個々の団体ではできないことにチャレンジをするための地域の市民活動ネットワークですが、近年では情報が得られやすくなったことや、高齢化など、様々な理由で参加団体が減ってきています。しかし、自分たちの団体の現状の情報を出し合うことで、後継者や担い手の情報、事業の継承など、今後について前向きな話もできる場として、もう一度活かせる場合もあるかもしれません。

○活動の“中締め”をしてみる

飲み会でも、ある程度時間が経つと、「言いだせないけど帰りたい人」もいる。ずるずると長引かせるより、「もっと続けたい！」という人で再度集まれるようにする。「疲れた」「十分にやってきた」という人が多いと、新しいチャレンジにネガティブになってしまうことがある。

○「活動の期限」「役員の任期」を設ける

5年間くらい経つと、社会的な情勢や地域の事情、かかわっている役員やメンバーのライフステージの変化もある。あらかじめ活動を見直す期間を設定しておくことが望ましいが、途中からでも設定してみる。役員はなるべく交代する仕組みと雰囲気があった方がいい。代表などは気持ちよく交代できるように表彰をしてみるとか、相談役や顧問にしてみるとか、数年後にまた代表をやるとか、動きをつくってみる。

―――

10月以降、自治会や福祉系の団体の方々ににも、今回の話をもとに「後継者育成」「世代交代」「事業継承」についてお聞きしていきます。